旅立ち

肌寒さを感じる平成二十一年の晩秋の夜、杉崎徹（とおる）は、恋人の東美知子（あづま）から部厚い手紙を受け取って、得体の知れない不安に襲われた。

それはＡ４判ほどの大きな封筒に入っていたから、彼のアパートの郵便受けの投入口にはそのまま入らず、二つ折りにされて、全体の三分の一以上が突き出して見えていた。仕事から帰宅した時、それを薄明かりの下で見た彼は、最初は折りたたんだ新聞が挿してあるのかと思った。が、近づいてみるとそれは普通の事務用の茶封筒であり、その裏には「美知子」という懐かしい手書き文字が、多少改まった感じにペンで書かれていた。徹はその文字を見て、胸が締めつけられる思いがした。この一ヶ月間、美知子に連絡をとろうとして、あらゆる手段を尽くしても適（かな）わなかった努力が、その三文字のおかげでやっと報われたと感じた。が、その一方で、封筒の部厚さに何か不吉な予感を覚えたのだった。

美知子の手紙には、こう書いてあった。

――最愛の人、徹さんへ

私が突然、あなたの前から姿を隠したことをどうか許して下さい。これは、あなたに会いたくなかったとか、別の人ができたとかいうのでは決してありません。心を焦がしてあなたと会っても決して結ばれないという苦しみが、私には堪えられなくなったからです。

「結ばれない」などといっても、あなたはきっとピンと来ないでしょう。だって、つい数ヶ月前には結婚の話までしていた私たちなんですから。でも、事態が突然変わりました。私はそれを、あなたにすぐ言うべきかどうか迷いました。最初は、この残酷な事実を知らせて、二人の破局を誰の目にも明らかにするのではなく、何か別の理由で――たとえば、私があなたを裏切ったことにして――あなたの方から私を棄ててもらう手立てを考えたこともありました。でも、そんな不正直で、卑怯で、人の心をボロボロにするようなことをしてはいけない、と気がつきました。なぜなら、人間が一生のうちで真に偽りなく、自分の本心を話す

ことができる相手は、そんなに数が多くなく、今の時点では、それは私の父母や兄弟以上に、最愛の人、あなたであることに気がついたからです。

前置きが長くなってすみません。

ちょうど一年ぐらい前のことだったと思いますが、私があなたも遺伝子カードを持ってほしいと言ったのを覚えていますか？　あなたは冗談っぽく、「これでお互いにカード恋愛ができるネ」なんて言いましたが、私はそういう遺伝的相性や将来の遺伝病の予測などを気にしていたのではなく、母親の遺言を守ろうとしただけです。母は四十二歳のとき癌で死んだことは前にも話しましたが、その時、私宛の手紙を残していたことは話しませんでした。その手紙には、結婚相手を選ぶ時は、相手の遺伝子と自分の遺伝子の比較を専門家に頼むように、と書いてありました。当時中学生だった私には、その意味がよく分からなかったので、父にそれを聞くと、父は難しい顔をして「よく分からないな……」と言うだけでした。

ところが大人になって、私があなたとつき合いだして一

年ぐらいたったある日、父は真面目な顔をして、あなたとは結婚を考えてつき合っているのかと問い質しました。その日は、あなたと北陸を旅行したすぐ後のことです。父には、陽子たちと一緒だと言ってありましたが、何か不自然なものを感じていたのかもしれません。私は父に、あなたとは結婚を考えて真剣につき合っていると答えました。すると父は、母の手紙のことを話しはじめたのです。

父にとっては、その話をするのはつらいことだったと思います。父は、母が手紙に書いた「遺伝子の比較」の話には、実はちゃんとした理由があると言うのです。なぜなら、私はＡＩＤによって生まれた子だから、と言いました。ええと、日本語では「非配偶者間人工授精」とかいうんでしたっけ……つまり私は、父とは遺伝的なつながりがなく、母とだけつながっているというのです。私のショックは大きかったですが、同時に、長年の疑問が解けたように感じました。それは、私の容貌が父にあまり似ていないことです。小さい頃から、そのことが話題になると、父は必ず不愉快な顔をしました。また三年前に〝医療革命〟と称して

「遺伝子カード」の制度ができてすぐに、父が私にカードを作らせた理由も理解できました。

世の中には、この制度の本来の目的とは別に、カードの情報をマッチさせて相手を探す「カード交際」や「カード恋愛」を期待して、自分の遺伝子カードを安易に作る人もいますが、私はそんな用途に自分のカードを使う気は全くありませんでした。普通に生まれた人は、カードがなくても、両親の遺伝情報から自分に必要な情報を比較的簡単に割り出して、的確な医療を受けることができます。しかし、ＡＩＤや卵子提供、受精卵提供で生まれた人は、本人の遺伝子を直接調べないと医療面で的確な判断ができないので不利になるわけです。父はその点を考えてくれたのだと思います。

また、こういう人たち（自分もその一人ですが）は、少数の人の遺伝情報を共有しているので、お互いに遺伝的に近い場合があるという話でした。つまり、他人のように見えても親戚である場合もあるというのです。私があなたに遺伝子カードを作ってほしいと言ったのは、最終的にそう

いう確認が必要かもしれないと思ったからです。あの時私は、本当はあなたに「結婚してほしい」と言いたかったのです。

こんなことを今ごろ手紙で言うのはおかしいですね。でも、このカードをあなたが作ってくれたことを、私は今では悔やんでいます。これって、ずいぶん勝手な言い草ですね。でも、この口惜しい思いを、この不条理な結果を、私はどう表現したらいいか分かりません。父はむしろＡＩＤなんかには断乎反対して、私をこの世に誕生させなければよかったとさえ思います。

ああ、徹さん、人間って何のために生まれてくるのですか？　苦しんで、絶望するためなの。最愛の人にめぐり遭って、そして別れるために生まれるのですか？

母の遺言にしたがってあなたからカードを借り、区の遺伝情報センターへ持って行った私は、係の人に部屋へ呼ばれてこう言われました。

「お父さんが同じですね」

私は即座に「いいえ違います」と言いました。だって本

当に違うんですから。少なくとも、私はその時点ではそう信じていました。でも、係の人はこう言うのです、「これは正確な情報です。お二人は父親が同じであるというのが遺伝子解析の結果です」と。私は「徹さんとは兄妹なんかじゃありません」と言いました。すると係員は「それでは、ＡＩＤとか受精卵の提供を受けられたんじゃありませんか？」と言いました。私は言葉を失いました。

徹さん、私はこの時、あなたに相談すればよかったのでしょうか？　自分だけでなく、あなたもＡＩＤか受精卵提供によって生まれたなんて、私からあなたに言うべきことでしょうか？　それともあなたは、この事実を知っていたのですか？　私は正直言って、自分に何が起こっているのかよく分かりませんでした。頭の中が真っ白になって、やたらに喉が渇いていました。人間のやることだから、遺伝子解析の結果も間違うことはあるだろうと考えました。あなたに話すのは、別の所でもう一度確認してからでも遅くないと思いました。父に相談しようとも思いました。あなたのご両親についても、いろんな疑問が湧きあがってきて、

物事を順序立てて考えることができなくなっていました。

私が父と遺伝的につながっていないということだけでも、私の人生を変えてしまうほどの出来事だったのに、今度は、私の遺伝上の父親はあなたの遺伝上の父でもあると言われたのです。恋人としてつき合ってきた人が、実はお兄さんだったなんて、それを誰も知らなかったなんて！

徹さん、私は旅に出ています。

東京は、あなたとの思い出が多すぎて、何をしようとしてもあなたのことを考えてしまいます。会社には長期休暇を申請しました。自分にもあなたにも全く関係のない、知らない町へ行って、自分の人生を考えなおそうと思いました。私はなぜ、こんな目にあわなければいけないのでしょうか。二十歳を過ぎてから、自分が何者であるかが分からなくなるなんて、ずいぶんなことだと思いませんか。親というものは、自分が親であるというだけで、子の人生をめちゃくちゃにしてしまう権利があるのでしょうか？

真実だと思っていたあなたとの愛……あれは幻想なのですか？　間違った心なのですか？　兄を恋人のように

愛してしまったのは、私が悪いのですか？　それとも、とんでもない「偶然」に襲われたのでしょうか？　これは、町を歩いている時に、自殺のために飛び降りてくる人と衝突するよりも稀な「事故」ではないでしょうか？　こういう事故は誰も悪くなくて、それに遭遇した私とあなたが単に不運だったのです。そんな稀な不運のために、人生で最も大切な選択を誤るような人間は、本当はこの世に生きている資格などないのかもしれない。これからどんなに努力し、誠意を尽くして人生を送っても、こんな不運な人間は決して報われることはない。こう思って、私は一度死ぬことを考えました。

その時、私はある人に遭いました。それは中国地方の山の中腹にある寺の前で、杉並木の真っ直ぐな幹をぼんやりと見上げていた時でした。よくお遍路さんが着るような白い装束を無造作に着た六十代のお婆さんが、目の前で私を優しく見つめていました。その人が、もし悩みごとがあるなら、それを聞かせてほしいと言うのです。私はこの人の顔が、なぜか母の顔のように見えました。そして、心の中

のことをすべて打ち明けました。

するとその人は、「あんたは、なんて素晴らしい人生を生きているのかねえ！」と言って顔を輝かせるのです。私はあっけにとられて、その人の顔を見つめていました。「あんたのような稀な体験は、めったにできるものではないんだよ」とその人は言うのです。私は反論しました。「愛してはいけない人を愛するのが、どうして素晴らしいのですか？」すると、その人は言いました。「お兄さんを愛して、どうしていけないと思うの？　兄妹は愛し合うのが当然なんだよ」私は抵抗しました。「兄妹愛と恋愛は違います」でも、その人は言いました。「愛は、自分と相手との一体感なんだよ。その意味では、兄妹愛も恋愛も本質的には同じもの。ただ恋愛は、相手を自分のそばに取っておきたいと思うし、また、自分を相手に捧げたいと思うもんだからね。その強い牽引力さえ緩めれば、兄妹のような関係に自然になれるよ」私は「そんなこと、できません」と、その人に言いました。

すると、このお婆さん（仮に「Sさん」としておきます）

は、こんな話をしてくれました。

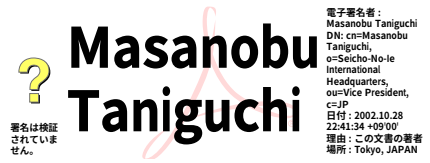
Sさんは、自分がもらい子であることを十八歳になるまで知らなかったそうです。大学受験で戸籍謄本を取り寄せたときにそれを知り、衝撃が大きくて勉強に手がつかなくなり、結局、家を出て大阪で働くことになりました。養父母とは家出後二年ほど音信不通だったのですが、ある時手紙を書くと、返信の中に生みの親の連絡先が書かれていました。尋ねて行った裕福そうな家には初老の夫婦が住んでいましたが、Sさんの来訪には心を動かされたものの、きちんと養子縁組をしたのだからと言って、Sさんを迎え入れようとはしなかったそうです。でもSさんは、その実父母との短い会見の中で、自分と似た容貌のこの二人がいるから自分が今存在すると知り、また、この二人の生活を垣間見たことで、存在の基盤が広がったように感じたそうです。自分には四人の親がいるのだ、と。それ以来、養父母との関係はもとにもどり、〝本当の親〟というのは育ての親だと分かったそうです。

だから、ＡＩＤで生まれた私にも「二人の父」がいると

いうのです。また、もし〝本当の父〟がいるとしたら、それは遺伝上の父ではなく、育ての父であるはずだ、というのです。そして、あなたとのことについては、自分に兄がいると知っただけでも素晴らしいのに、その人と人間的に深いつながりが持てたことは有り難い経験だというのです。また、「恋人」なら別れることがあっても、「兄」なら別れる必要もないのだから、二人の間の〝牽引力〟さえ弱まれば、前よりもずっと豊かな人生を送ることができるはずだ、と言うのでした。

徹さん、私はあなたにまだまだ強い牽引力を感じます。でも、これからはSさんの言うとおりにしてみようと思います。どうか「お兄さん」と呼ばせて下さい。会えば、牽引力が強まりそうです。だから、手紙を書くことを許して下さい。そして、できることなら、私の「妹」としての旅立ちを祝福し、応援して下さい。あなたの応援があれば、私はきっと何でもできます。

この手紙と一緒に、あなたの遺伝子カードをお返しします。

最愛の妹、美知子より

――東美知子の手紙の末尾には、鳥取県倉吉市の郵便局にある私書箱名が記されていた。